

教員をはるかに飛び超えていく生徒たち

福井県立藤島高等学校 教諭 中川 和也

「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）」とは、普通の授業では学習することのない内容の科学実験や研究を学校単位で行い、それを全国の高校生向けに発表する、文部科学省主催の取組みです。私の勤務校は、SSHの指定を受けています。特に2年生次には生徒が興味を持っていることを、大学の先生や研究機関にも手伝ってもらいながら、じっくり研究する授業が設定されています。ある生徒は「私は、谷崎潤一郎の『痴人の愛』が好きで、やたらと文章の中で「鼻」を強調する表現が出てくるんです。研究してみてもいいですか？」、「先生のお家の近くの校庭や田んぼのあぜ道に、ワカメみたいなくによぐによありませんか？あったらバケツ一杯分取ってもらえませんか。今、研究してるんです！」と教員に聞いてきます。

この学校で担任をしていたり、授業を担当していたり、あるいは研究の講座（私の場合「日本語・日本文学講座」というゼミ）を担当していたりすると、冒頭のような思いがけない「問い」を生徒が投げ掛けてきたり、思いもよらない形で生徒の研究に「巻き込まれ」たりします。そして、何かを探って追究していくプロセスに、一緒になって頭を悩ませます。試行錯誤して、失敗して、時には大学の研究者に生徒と一緒にあって厳しい指摘を受け、落ち込みます。授業であれば、教員が知っていること、学んでもらいたいことをある程度把握できているので、生徒に指導できます。しかし、SSH探究では、こちらが知らないことばかりです。生徒の方がいつの間にか遙か遠くに到達することだってあります。冒頭の生徒は、強い興味・関心から「谷崎潤一郎『痴人の愛』における鼻の象徴性について」、「シアノバクテリアについて」の研究をするようになりました。

「教員のやりがいは、生徒が自分を遙かに超えていくのを見られること」という私の大学時代の恩師の言葉を、今でも忘れられません。その言葉の通り、私はそういう「やりがいある毎日」を過ごしています。